

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 1月 30日現在

機関番号：32689
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520602
 研究課題名（和文） 社会言語的環境の異なる留学体験が言語習得・言語態度に及ぼす影響に関する調査
 研究課題名（英文） An investigation of the influence of study-abroad experiences on language learning and language attitudes in different sociolinguistic contexts
 研究代表者
 飯野 公一（IINO MASAKAZU）
 早稲田大学・国際教養学術院・教授
 研究者番号：50296399

研究成果の概要（和文）：本研究は社会言語的環境の異なる留学体験がいかに言語習得や言語態度の形成に影響を及ぼすかを調査した。特に、非英語圏への留学を選択した日本人大学生が非英語の現地語を BICS (Basic Interpersonal Communication Skills)の観点から認識しているのに対し、英語を CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) の観点からとらえるなど、重層的な言語観を形成することが確認され、言語相対化能力の向上に資する可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the influence of study-abroad experiences on language learning and language attitudes in different sociolinguistic contexts. It was suggested that the Japanese undergraduate students participated in this study, being aware of BICS and CALP functions, formed a multilayered language attitudes and improved their linguistic relativization competence.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：社会言語学、留学、外国語教育制度、言語政策、言語習得、言語態度、英語、Kachru

1. 研究開始当初の背景

これまで日本における留学政策は国際貢献という観点から、途上国からの留学生受け入れに重点が置かれてきたが、日本人の海外留学についての対応は不十分であったとされる。また、受け入れはアジア中心、派遣は欧米中心であり、均衡がとれていない状況であった（中央教育審議会、2003）。この不均衡は筆者の勤務校である早稲田大学国際教養学部（非英語圏である日本において英語で

授業を行うプログラムの一例）の1年間必修留学プログラムにおいても顕著であった。しかしながら、現在当学部日本人学生の2割程度ではあるものの、非英語圏へ留学する学生が徐々に増加する傾向にあった。米英中心からより多極化された世界の政治経済的变化を背景に多言語、多文化社会への関心が高まりつつあるなか、非英語圏において英語で授業が行われる、いわゆるインターナショナルプログラムの増加もこうした留学先の選択

へ大きな影響を与えている可能性がある。このような選択行動は、個人レベルでの言語ステータスプランニング (status planning, Haugen, 1983) としてとらえることができ、言語計画・言語政策研究の対象としての可能性を持つ。こうした中、これまでの留学と言語・文化学習の研究の多くが、ノン・ネイティブの言語学習者がネイティブの言語社会に留学し、そこでどのような学習環境のなかで言語習得の経験をするか、ということが主題であった (Iino, 1996, 2006)。しかしながら、上述のように非英語圏における英語で授業を行うプログラム、すなわち現地での生活言語と学習言語が異なるような学習環境のもとで、学生がどのような社会言語生活を体験し、それが言語習得や言語態度を形成するうえでどのような影響を与えるかについての研究はこれまで行われていない。また、学習者の言語習得状況や学習経験を留学前と後でシステマティックに検証した研究もわずかであるのが現状である (Collentine & Freed, 2004; DuFon & Churchill, 2006; Freed, 1995; Jackson, 2008)。留学は外国語学習にとって最もてっとりばやい効果的な方法であると多くの人々が信じているものの、留学期間中にどのような言語資源、環境が言語学習へ影響を与えているのかについては、学術的研究が十分なされてきたとは言えない。本研究は、留学と言語学習、および言語政策に関する社会言語学的アプローチからの基礎研究として位置づけられる。

また早稲田大学国際教養学部が、平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム (教育G P)」において「多文化・多言語社会に向けての教養教育」が採択されたこととともない、日本人学生の留学先での社会言語体験を再度新たなコンテキストで研究する新たな意義が見いだされた。本研究においては、グローバル化の進展する社会のなかで個人レベルでの言語管理 (Language Management, Neustupny 1978, 1987, Spolsky 2009) の状況を調査することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本人大学生の一年間の海外留学経験が彼らの言語習得、言語態度 (language attitudes, Brown, 2000; Schumann, 1976)、アイデンティティ等の形成にどのような影響を及ぼすかを調査、分析することである。とくに英語を教育言語とするプログラムのなかで、Kachru (1985) のモデルをもとに、(1)英語を母語とする人々が入植し、英語が第一言語として話されている社会

(The Inner Circle、例えばアメリカ、オーストラリア)、(2)英語が旧植民地時代の統治言語として使われ、現在第二言語として使われている社会 (The Outer Circle、例えば、シンガポール、インド)、(3)英語を外国語として学習、利用されている社会 (The Expanding Circle、例えば、中国、タイ) の3つのタイプの地域へ留学する学生を比較し、それぞれどのような社会ネットワーク (Blom & Gumperz, 1972; Milroy, 1987) を形成し、その社会言語体験が言語習得や言語態度へ及ぼす影響を量的・質的に調査、分析する。

3. 研究の方法

平成21年度においては、「予備調査」として留学中あるいは留学終了後の学生のなかから、Kachru の分類の3つのグループの学生 (23人) の協力を得て、インフォーマルなインタビュー調査を実施した。また、タイ・チュラロンコン大学との交渉を経て、本研究に向けての協力を得た。この間、関連文献の収集、データベースを作成するための音声収録、整理のための機材整備を行った。なお、インタビューのフォーマットについては、ワシントン大学准教授 Karen Gourd 氏と2005年度に行った共同研究 (Gourd 氏が早稲田大学に客員研究員として滞在した際に共同で実施した国際教養学部学生を対象とした言語態度に関する研究) で用いたものをベースに改良作業を行った。文字化作業にむけて学生リサーチアシスタントの指導も行った。

平成22年度においては、留学前および留学終了後の学生のなかから、Kachru の分類の3つのグループの学生 (38人) の協力を得て、インタビュー調査を実施した。また、本学留学センターへ提出された学生アンケートのキーワード分析、談話分析を行った。さらに、タイ・チュラロンコン大学の協力を得て、現地での言語環境に関するフィールド調査を実施した。録音、録画データについて、文字化作業を逐次実施した。

平成23年度においては、継続してインタビュー調査 (54人) を実施し、フォーカスグループによるディスカッションをビデオ録画、解析した。また、本学留学センターへ提出された学生アンケート (723人分) の談話分析を継続した。さらに、タイ・チュラロンコン大学の協力を得て、現地での言語環境に関する調査を再度実施したほか、ワシントン大学にて Gourd 博士とのこれまでの共同研究を整理し本研究のデータ利用について協議した。この間、関連文献の収集、データベースを作成するための

音声収録、整理を行った。また、ペンシルベニア大学バトラー後藤裕子博士には逐次分析結果へのアドバイスを受けた。8月には **Sociolinguistics 19**, Freie Universitat Berlin にて学会発表を行った。

4. 研究成果

日本全体で見た場合、日本から海外への留学生数は2004年以降減少傾向にあるものの、本研究対象（早稲田大学）においては2004年に国際教養学部が設立され1年間の海外留学がカリキュラム上必修となっていることや、他学部生の増加もあいまって、増加傾向をたどっている。

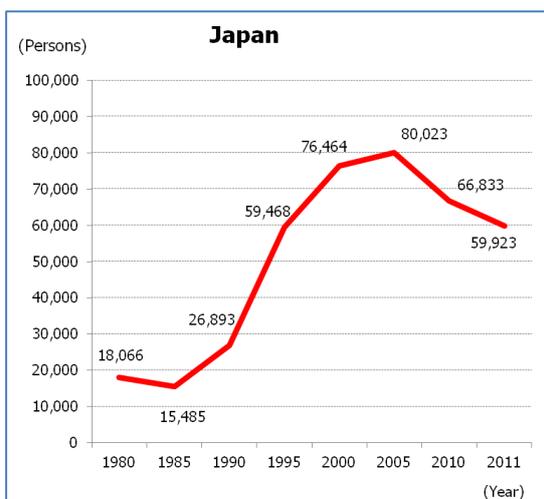


図1 日本から海外への留学者数の推移 (文部科学省平成24年1月)

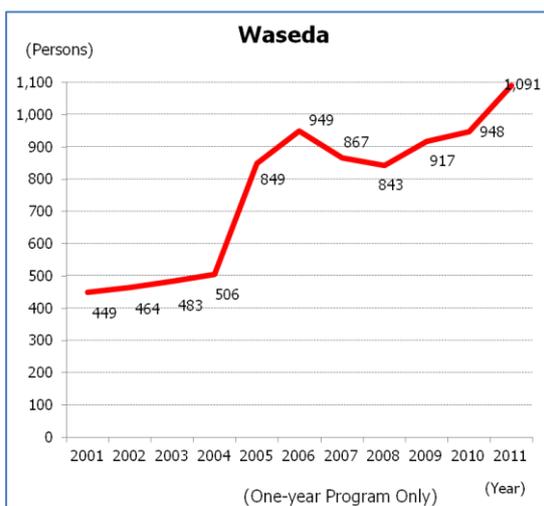


図2 早稲田大学一年留学プログラム参加者推移 (早大留学センター調べ)

留学先の国・地域を見てみると、内訳には若干の差異があるものの、全国的にも早稲田大学においても、Kachru 分類の Inner circle への留学が約6割を占めている。早稲田大学学生の留学先として中国、フランス、スペイン、韓国、イタリア、スウェーデン等の非英語圏へ派遣される場合には、現地語で授業が行われるプログラムと英語で授業が行われるプログラムがあり、なかでも EMI (English-medium instruction) プログラムが増加している。

Japanese Students Studying Abroad: Top 10 on Nationality Basis (2009)

	Country/Region of Destination	Number of Students	Percentage of Total
1	U.S.A.	5,925	24.7%
2	U.K.	2,599	10.8%
3	Canada	2,547	10.6%
4	Australia	2,509	10.5%
5	China	2,269	9.5%
6	Korea	1,891	7.9%
7	France	952	4.0%
8	Germany	923	3.8%
9	New Zealand	780	3.3%
10	Thailand	511	2.1%
	Others	3,082	12.8%
	Total	23,988	100.0%

Data Source: JASSO (based on MOUs between Japanese Universities and Foreign Universities)

Waseda Students Studying Abroad: Top 10 on Regional Basis (2011)

	Country/Region of Destination	Number of Students	Percentage of Total
1	U.S.A.	422	38.7%
2	China	143	13.1%
3	U.K.	130	11.9%
4	France	52	4.8%
5	Canada	43	3.9%
6	Spain	37	3.4%
6	Korea	37	3.4%
8	Italy	34	3.1%
9	Australia	28	2.6%
10	Sweden	21	1.9%
	Others	144	13.2%
	Total	1,091	100.0%

(One-year Program Only)

これまでも日本人学生が選択する留学先と、海外から日本に来る送り出し元とのミスマッチが指摘されてきたが（中央教育審議会2003）、日本人学生の約6割が英語圏、とりわけ inner circle を選択する理由として明らかになったことは、理想的なモデルとなる英語を希求する傾向、学習経験に基づく学習対象としての英語へのアプローチ、英語圏への強い文化的あこがれ、キャリア選択への必要性や社会からの要請、参加プログラム供給数の充実などが背景にある。留学センターに提出された志望理由書において記載された目的においては、英語学習が最も多くあげられた。

また、非英語圏を選択する理由には、すでに高度な英語運用能力を達成している、英語が苦手でも何か他の言語を学習したい、何か他の人と違うことをしたい、新しい文化に出会いたい、特別な目的（芸術、教育制度、福祉、途上国問題等）を持って非英語圏のみで提供されるプログラムに参加したい、今後の世界の言語勢力を予測すると中国語が期待されるから、などが上位を占めた。個別のケーススタディーの内容については、紙面の都合上本報告書に記載することはできないが、タイ、スペイン、スウェーデンのケースでは、「以前住んだことのあるアメリカが好きでなかった」という共通の特徴が見られた。このことは、個人の学習言語選択においては、マクロレベルでの国や地域との関係性とミクロレベルでの社会・文化エクスポージャーや言語学習履歴などが複合的に影響していることが見られる。

また、留学体験を経て、英語圏留学者は英語でコンテンツ学習をするなかで、英語に自然に接するようになったという傾向が見られる一方、非英語圏への留学者はより重層的な言語観を形成している可能性が見られる。すなわち、現地語を生活のための言語として学習する、初級レベルから始める、など BICS (Basic Interpersonal Communication Skills) の側面を意識しながら学習し、文化、芸術、特殊性に強い関心を示す傾向にある。また、英語については、CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) の側面を強く意識し、授業で用いられる working language, lingua franca としての英語、学ぶものは英語文献から、知識は英語に集積されている、など、英語圏の先進性を認める回答が多く見られた。

さらに、日本語と英語という2言語を使用していたときには経験しなかった、3つの言語を比較しながら得られる3次元的な立体感を非英語圏では経験した、という見方が提示された。筆者はこのような言語観の形成を言語相対化能力 (linguistic relativization competence) として今後考察を深めていく計

画である (Carroll, 1991; Deutscher, 2011; Lucy, 1992)。

なお、本報告書では、outer circle についての詳細はサンプル数の不足や個別ケースの特殊性などから記述できないが、シンガポールや香港の大学での留学体験はコンテンツ中心の極めてインテンシブなエリート型教育の傾向があり、英語と現地語との関わりも expanding circle とは異なることから、今後の研究対象としたい。

本研究のきっかけとなった Kachru の英語使用の3分類モデルは、英国植民地化の歴史の中で意識されてきた英語の ownership, authenticity などの概念とあいまってこれまで議論されてきたが、本研究を通じて多くの日本人大学生、特に非英語圏への留学経験者は、こうした中心と周辺との力関係の狭間にあつて、葛藤を繰り返しながらも、言語相対化能力を向上させている可能性が見いだされた。今後日本人大学生にいかにか非英語圏へ興味を向けさせるか、いかに言語、文化の多様性を意識させるか、といった方策が求められることになるが、なかでも非英語圏での EMI プログラムへの派遣が果たす役割は大きいと考えられる。

海外留学が文教、労働、産業政策として推奨されるなか、留学を通じての学びを分析した研究は、とくに外国語教育制度、言語政策の観点からは限定的であり、本研究はその分野での基礎研究と位置づけられる。今後の研究課題としては、今回集められた質的・量的データを中心とした知見を活かし、留学体験が英語、現地語の言語習得、国際理解および異文化コミュニケーション能力に与える影響、効果を評価する指標を提示することにある。そのことは「グローバル人材育成推進事業」等の政策評価としても喫緊の課題である。

(参考文献)

Blom, J. and Gumperz, J. (1972). Social Meaning in Linguistic Structures: Code Switching in Northern Norway. in John Gumperz and Del Hymes (eds.): *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of communication*, 407-434. New York: Holt, Rinehart, and Winston.

Brown, H. (2000). *Principles of Language Learning and Teaching*. New York: Longman.

Carroll, J. (ed.) (1991). *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge: The M. I. T. Press.

Collentine, J. and Freed, B. (2004).

Learning context and its effects on second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 26 (2), pp. 153-71.

Deutscher, G. (2011). *Through the Language Glass: Why the world looks different in other languages*. London: Random House.

DuFon, M. and Churchill, E. (eds.) (2006). *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.

Freed, B. (1995). Language learning and study abroad. in B.F. Freed (ed.) *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context*. pp. 3-33. Amsterdam: John Benjamin.

Jackson, J. (2008). *Language, Identity and Study Abroad: Sociolinguistic Perspectives*. London: Equinox.

Haugen, E. (1983). The implementation of corpus planning: theory and practice. pp. 269-290. in Cobarrubias and J. Fishman (eds.). *Progress in Language Planning: International Perspectives*. Berlin: Mouton.

Iino, M. (1996). 'Excellent Foreigner!': *Gaijinization of Japanese language and culture in contact situations - an ethnographic study of dinner table conversations between Japanese host families and American students*. Doctoral dissertation. University of Pennsylvania. Dissertation Abstracts International, 57, 1451.

Iino, M. (2006). Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources. pp. 151-173. In M. DuFon and E. Churchill (eds.). *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.

Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. in R. Quirk and H.G. Widdowson (eds.). *English in the world: Teaching and Learning the language and literatures*. pp. 11-30. Cambridge: Cambridge University Press.

Lucy, J. A. (1992). *Language Diversity and*

Thought: A reformulation of the linguistic relativity hypothesis. Cambridge: Cambridge University Press.

Milroy, L. (1987). *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.

Neustupny, J.V. (1978). *Post-Structural Approach to Language*. Tokyo: University of Tokyo Press.

Neustupny J.V. (1987). *Communicating with the Japanese*. Tokyo: The Japan Times.

Schumann, J.H. (1976). Social distance as a factor in second language acquisition. *Language Learning* 26(1), pp.135-43

Spolsky, B. (2009). *Language Management*. Cambridge: Cambridge University Press.

中央教育審議会 (2003)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03121801.htm
Retrieved on January 18, 2013.

文部科学省 (2012)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/01/1315686.htm
Retrieved on January 18, 2013.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

Iino, Masakazu and Murata, Kumiko (2012)
'We are jun-Japan' - Dynamics of ELF communication in an English medium academic context, proceeding of Sociolinguistics Symposium 19, Berlin. pp. 239-240 in thematic session: Sociolinguistics perspectives on the internationalization of higher education - English language proficiency and identity in the international university.

飯野公一 Iino, Masakazu (2012).

「英語でつなぐ世界の高等教育 - SILS のケースを中心に」English as a lingua franca connecting higher education in the world - a case from SILS, Waseda University.

Waseda Working Papers in ELF (English as a Lingua Franca).

[学会発表] (計 9 件)

飯野公一 (2012)

グローバル化と多様性 — G5 大学の事例とととして 招聘講演 G5 年次大会 国際基督教大学、2012 年 10 月 12 日

Iino, Masakazu (2012)

Reporting on the U.S. - Japan Higher Education Panel II. Invited speaker. CULCON. Washington, D.C., September 11, 2012

Iino, Masakazu (2012)

Towards the enhancement of academic collaboration between the U.S. and Japan. Moderator of the panel. U.S. - Japan Higher Education Panel II, USJI. Washington, D.C., September 10, 2012

Iino, Masakazu (2012)

'We are jun-Japa' - Dynamics of ELF communication in an English medium academic context. Panel session: Sociolinguistic perspectives on the internationalization of higher education. Sociolinguistics Symposium 19. Freie Universitat Berlin, August 24, 2012

Iino, Masakazu (2012)

Japan Next: New value creation by the world's youth, invited lecturer, Chulalongkorn University, February 7, 2012

飯野公一 (2011)

マレーシアの英語重視政策 — その挑戦から学ぶこと 日本アジア英語学会 第 29 回 全国大会 基調講演 (Language-in-education policy shift in Malaysia: Challenges of teaching mathematics and science in English. Keynote lecture at the 29th national conference of the Japanese association for Asian Englishes)、2011 年 12 月 10 日

飯野公一 (2011)

英語でつなぐ世界の高等教育 第 2 回 E L F 研究会、早稲田大学、2011 年 7 月 22 日

飯野公一 (2010)

教育のグローバル化に向けて 日本 E S P 協会月例研究会、2010 年 7 月

飯野公一 (2009)

「英語で教える」言語政策 日本時事英語学会第 108 回関西支部例会 2009 年 5 月

[図書] (計 1 件)

Masakazu Iino (2011) Language Idealism and Realism in Globalization: Exploring Homogeneity Beliefs in Japan. pp. 61-81. In *Globalization of Language and Culture in Asia*. The Continuum International Publishing Group: London

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計◇件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯野 公一 (IINO MASAKAZU)

早稲田大学・国際教養学術院・教授

研究者番号 : 50296399

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :